

前回 (2025 年 12 月号) は、ダニエル・パリッシュ・キダーによるカトリック文化に内在する「異質性」およびブラジルのカトリック表象とその文化的特性に対する批判的見解について取り上げた。この見解は、ブラジル社会が取り返しのつかない「宿痾」に病んでいるという認識にとどまるものではなかった。むしろキダーは、ブラジルはいまだ生成の途上にあり、いかようにも形づくることが可能であると信じていた。彼は、ブラジルが自立できない要因として教育の欠如と国民の低い識字率を指摘し、プロテスタント思想に基づく宗教教育の必要性を説いている。⁽¹⁾

少年との出会い

キダーは、学校設立に関する具体的な構想を明確には示していなかったものの、問題の所在を明晰に把握したうえで、自らの言説を展開していた。1839 年、キダーはブラジル北東部パライバ州のカベデロ港を遊歴中、偶然出会った 14 歳前後の少年と、次のような会話を交わしている。⁽²⁾

キダー：このあたりに学校はあるか。

少年：うん、ある。

キダー：どこにあるのか。

少年：屋敷にある。

キダー：生徒は何人いるのか。

少年：さあ、分からない。長椅子が 3 つ分ほど、いっぱいになるくらいかな。

キダー：君もそこに通っているのか。

少年：いいえ。去年、修了した。

キダー：字は書けるか。

少年：いいえ。読むことも書くこともできない。

キダー：では、学校で何を学んだのか。

少年：何も。

学校を修了した後、その少年は漁師となったが、彼の家族の中で読み書きのできる者は一人もいなかった。しかし、学校に通っていたにもかかわらず読み書きができないという事実にはキダーは強い憤りを覚えた。とりわけ、少年が学校で何も学んでいないと語ったことに対して、キダーは次のように述べている。

最後の断言については疑う理由はなかった。しかし、身分の高低を問わず臣民のために、寛大ではあるもののやや誤った政策のもとで政府が整えてきた教育制度に対し、彼らがこのように愚鈍なまでに無関心であるさまを目の当たりにして、私は心を痛めた。⁽³⁾

こうしたキダーの言葉を受けて、ヴァスニ・デ・アルメイダとジョゼ・ネト・ソウザ・ゴメスも、少年が文盲であった点について、19 世紀前半におけるブラジル帝国の「不十分な公教育政策」に起因するものであると指摘している。⁽⁴⁾しかし、「不十分な」という評価にとどまらず、管見の限りでは、それは縁故主義的性格を帯びた公教育政策であったとも言える。

ブラジル帝国の公教育政策の性格

当時のブラジルでは、政府による公教育政策が実施されていたものの、その本質は排他的でエリート主義的な性格を有していた。市井の人々の低い識字率は、パターンリスティックな寡

頭支配のもとで、支配体制の維持に資するものとして機能していた。その結果、読み書きは一部の特権階級の子どもたちへのみ許され、政府による公教育政策は、その運用において、実質的にはエリート中心の縁故主義的制度として機能していた。

先に見た少年のように、特権階級に属さない子どもたちが通っていた学校の「屋敷」や、学校に通っていたにもかかわらず何も学んでいなかった理由については、19 世紀ブラジルの教育史を研究するシンシア・グレイヴェ・ヴェイガによって、次のように説明されている。

学校を指す「屋敷」とは、今日の学校を想起させるような専用の校舎―教室や職員室、図書館などを備えた建物―を意味するものではなかった。当時のブラジルにおいて学校とは、多くの場合、教師の私宅を指していたのである。しかも、そのような教師の家には教科書すら存在せず、教育環境はきわめてお粗末なものであった。ヴェイガは、公教育の推進を阻んでいた要因として、次の 3 点を挙げている。すなわち、国民の「貧困」「教育の重要性に対する無関心」、そして「教師およびその教授法をめぐる課題」である。⁽⁵⁾

「貧困」と「教育の重要性に対する無関心」は、一体化したものとして理解できる。先に見た少年の場合、彼は特権階級に属さない漁業一家の出身で貧しかったが、政府による教育政策により学校に通学した。しかし、学校に通うことに意義を見出せず、無関心な状態となった結果、読み書きを習得できず、結局何も学ばなかった。これは、漁師として生活する上では、読み書きが必ずしも必要ではなかったためと考えられる。そのため、公教育政策については、実際には市井の人々の現実や意識と、特権階級の国民の意識との間に大きな乖離があった。

ただし、キダーにとって、学校に通っているにもかかわらず読み書きができないという事実は受け入れがたいものであった。彼にとって、学校教育は単なる識字や社会的上昇の手段ではなく、迷信や宗教的桎梏を克服するための基盤として位置づけられていたからである。少年との別れの際、キダーは彼とその家族に読み書きへの関心を促すため、福音冊子を手渡した。⁽⁶⁾キダーにとって、この福音冊子と読み書きへの関心は、ブラジルの「宿痾」に対する象徴的な処方箋としての意味を持っていたに違いない。

[註]

- (1) 歴史学者のリリア・シュワルツによれば、少なくとも 1870 年代までのブラジルでは、国民の約 84% が非識字であったと推定されている。
- (2) Daniel Parish Kidder. *Sketches of Residence and Travels in Brazil: Embracing Historical and Geographical Notices of the Empire and its Several Provinces*. Vol. 2. London: Wiley & Putnam, 1845, p. 181.
- (3) Ibid., p. 182.
- (4) Vasni de Almeida, José Neto Sousa Gomes. “Daniel Parish Kidder: sociedade, identidade e cultura nas narrativas de um protestante viajante no século XIX.” *PLURA, Revista de Estudos de Religião*, vol. 7, no. 2 (Jul.-Dez. 2016), p. 114.
- (5) Cynthia Greive Veiga. “Escola pública para os negros e os pobres no Brasil: uma invenção imperial” *Revista Brasileira de Educação*, vol. 13, no. 39 (Set.-Dez. 2008), p. 513.
- (6) Vasni de Almeida, José Neto Sousa Gomes, op. cit., p. 115.
- (7) Daniel Parish Kidder, op. cit., p. 182.